

## 部落差別を考える

部落差別は、住んでいるところによって、人間関係を切っていくとする許し難い差別です。国連の人権小委員会でも取り上げられた、我が国の解決すべき大きな人権課題です。この理不尽な差別により多くの人々が傷つけられてきた事実を考えると、一刻も早く解決しなければならない問題です。

少し年配の人なら、子どものころ、口げんかになると「そんなん、憲法に書いてあるんか！」という捨て台詞を言ったことがある人がいると思います。しかし、日本国憲法の第14条(平等権)の中にある「社会的身分により…差別されない」という部分が、部落差別を念頭に置いて国会で審議されたことを知る人は少ないと思います。実は、部落差別をしてはならないということは、我が国の最高法規である憲法にも書いてあるのです。

ところが、現実には、まだ部落差別をする人たちがいます。では、この人たちはどうして、国も世界も認めないこの理不尽な差別を今だに続けているのでしょうか。

考えられる1つの理由は、この差別が馬鹿げた迷信のようなものから生まれてきたということが分かっていないからです。もう1つの理由は、差別はだめだということは分かっていても、差別をなくしていくことに関しては無関心で、自分の問題ではないからと、知らん顔をしている人が多いからです。そして、差別する人たちは、それがいかに人を傷つける醜い行為であるかということを知っていないからです。

では、部落差別をなくしていくために一番必要なことは、何でしょうか。それは、人の痛みを知り、人を大事にできる生き方をみんなが獲得することです。このことを考えたとき、ある反差別の活動をしている人に言われたことを思い出しました。「部落問題のことが少し分かってきました」という私に対して、その人は「あなたが本当に部落問題のことが分かってきたのなら、家族に感謝されるようになるはずだ。部落差別をなくすることができるのは、人を大切にする生き方をしたいと思っている人だけだ。そういう人は、自分の一番身近にいる家族も大事にできているはずだ。身近にいる家族にも感謝されないうちは、まだまだ部落問題が分かったなんて言えないな」と言いました。

「部落差別の解決を考えることは、人としての生き方を考えることだ」と反差別の活動をしている人たちはよく言います。私は、「人を大切にする生き方をしましょう」と人には呼び掛けながら、自分自身は本当に周りの人たちを大切にしているのだろうか、と考えさせられました。頭で分かっているても実行に移せない人が多いことはよく言われますが、まさに自分もその一人なのだと思います。部落差別を考えることの奥深さを、あらためて実感しました。

私はこれからも、自分自身の生き方の問題として、部落差別をはじめとしたあらゆる差別の解決に向けて、自分は何ができるのかを考えていきたいと思っています。

